

【エッセイ・回顧】

愛知大学で中国を学んで

愛知大学法経学部経済学科 昭和 38 (1963) 年卒業 浅井 文人
聞き手 石田 卓生

入学

石田：浅井さんが愛知大学に進学された理由や経緯はどのようなものだったのでしょうか。

浅井：私は豊橋の出身ですから、東京とか名古屋とかそういうところには行けなかったのです。

石田：昭和 26 (1951) 年に愛知大学に入学された今泉先生¹は、「豊橋の人にとって大学というのは、東京や京都、大阪の国立でした。名古屋にも大学はあったけれど、名古屋大学や名古屋工業大学のような理工系が中心でした。そういうことで大学に進学できるとは思っていなかったのです。そうしたら愛知大学が豊橋に来たので、それならばと入ったわけです」²、とおっしゃっていました。浅井さんの場合も同じように、豊橋にあるからというのが大きかったのですね。

浅井：そうですね。

石田：浅井さんは愛大で中国語を学ばれましたが、高校生の頃から中国には興味があったのでしょうか。

浅井：それもあったかもしれませんが、愛大は中国関係が有名でしたから、入れたら中国語を学びたいなと思いました。

石田：愛大は中国が強いついていうのは、何か具体的な情報などがあったのでしょうか。

浅井：当時、新聞に小さいながら愛大というのは中国関係で優秀なスタッフがおるということが載っていましたので、愛大に入学するのであれば中国語を学びたいなと思ったのです。

石田：浅井さんは法経学部の経済学科でいらした。

浅井：そうです。専攻が中国経済というかたちで学びました。

石田：浅井さんが愛大に入る時に愛大のパンフレットとかそういうのはご覧になりましたか。例えば、浅井さんよりも前の方ですが、入学願書に中国留学させると書いてあり、それを見て中国に行けると思って入学した方がいらっしゃいました³。

浅井：まったく見ていないですね。私は家庭の事情で、大学に行けるのであれば愛大しかありませんでした。その愛大の中で

¹ 今泉潤太郎 (1935～) 愛知大学名誉教授。昭和 30 (1950) 年、愛知大学文学部文学科卒業。中日大辞典編纂委員長として『中日大辞典』を編纂した。瑞宝中綬章。

² 石田卓生「今泉潤太郎先生に聞く：愛知大学入学から中日大辞典編纂処へ」『日中語彙研究』(7)、愛知大学中日大辞典編纂所、2017年、3頁。

³ 藤井栄「女子学生に気が散る：タバコと食券を交換」『学生たちの証言で綴る創成期の愛知大学：愛知大学同窓会創立 55 周年記念誌』愛知大学同窓会、2007年、103頁。

も、先ほど言いましたように中国関係が特に優れているから、中国について勉強しようと思ったのです。

石田：愛大に入学されて、1年生の時は中国語と英語を履修されたと思います。

浅井：はい。

石田：今泉先生の頃の愛大は、「中国語と英語以外でも、独、仏、露、どれでも12単位取れば第一外国語になったんですよ。第一外国語も第二外国語も全部12単位なんです」⁴、ということですが、浅井さんも同じだったのですか。

浅井：私の時は英語がメインです。だから、第二外国語として何を選ぶか、ということじゃなかったのかなと思うんですけど。

石田：中国語の授業の先生はどなたでしたか。

浅井：鈴木沢郎先生⁵です。内山先生⁶、桑島先生⁷、それと張祿沢先生⁸ですね。当時、今泉先生は中国文学専攻の方は教えてらっしゃったと思いますが、私は今あげた4先生に習いました。

石田：戦前の東亜同文書院では、日本人の先生と中国人の先生がペアで授業をされたそうです。浅井さんの時はどうでしたか。

浅井：大体そうです。鈴木先生も、内山先生も張先生とペアで授業されていました。

私の時は贅沢ですよ。そういうかたちで来てくれたという記憶です。

石田：それが1年生の中国語の授業なのですね。

浅井：そうですね。1年だけでなく、2年も同じで、我々はずっと中国語を履修しました。ちょっと話題がそれですけど、張先生のお宅に行って遊んだり、食事したりもしました。そういうアットホームな環境で中国語を勉強させていただいたことには今でも感謝しています。

石田：張先生は本場の中華料理を振る舞われたのですか。

浅井：ですね。あの先生の料理は本格的でした。大きな鯉の料理が出てきた時には、皆びっくりしましたよ。そんなものを作っていただけで食べさせていただけっていうのは。餃子も作ったことがありました。

石田：そうですね。中国語の授業の教科書は『華語萃編』⁹だったのですか。

浅井：そうですね。

石田：浅井さんは1年、2年で『華語萃編』初集を学ばれたのですか。

浅井：そうだったと思います。中国文学専攻は他にもあったかもしれませんが、我々がもらったのは『華語萃編』初集でした。ただ、大学卒業した後、全て失くしてしまいました。

石田：お使いになったのは謄写版の『華語萃編』初集でしょうか。これを1年生、2年

⁴ 石田、前掲文、9頁。

⁵ 鈴木沢郎（1898～1981）愛知大学名誉教授。東亜同文書院卒（第15期生）。東亜同文書院教授を経て愛知大学教授。中日大辞典編纂委員長として『中日大辞典』を編纂した。勲三等瑞宝章。

⁶ 内山雅夫、東亜同文書院卒（第34期生）、東亜同文書院講師を経て愛知大学教授、愛大では『中日大辞典』編纂に従事した。

⁷ 桑島信一、東亜同文書院卒（第29期生）、満洲国財政部、中華航空公司を経て愛知大学教授。

⁸ 張祿沢、北京中国大学卒、愛知大学講師。

⁹ 『華語萃編』、東亜同文書院が作成した中国語教科書。1916年に1年生用の初集が刊行され、その後2～4年生向けに二集～四集が作成された。

生で一冊全部を終えられたのですか。

浅井：ほとんど終わったという記憶はありますけどね。

石田：今の中国語教書とくらべると結構な量がありますし、内容もかなり難しいように思います。

浅井：それもあってか2年生で中国語を止める学生がかなりいました。

「念書」について

石田：念書¹⁰はどうでしたか。4月入学と同時にやられたのですか。

浅井：やっていただきました。その時には私も先輩に恵まれていたと思っています。我々の上、その前の方たちは本当に親切で、そういう記憶が私は非常にありますね。念書という制度が非常にいいなと思います。

石田：念書は週に何回あったのですか。

浅井：毎日ですよ。朝の8時半から9時までです。

石田：北門近くの学生寮辺りにあった中国研究会¹¹の部屋ですか。

浅井：学校の教室でした。はじめの頃、参加者は30人とか50人ぐらいでしたが、だんだん減っていききましたよ。

石田：その先輩方は中国研究会の方ですか。

浅井：そうです。中国研究会の方ですね。5、6人来ていただいていた。

石田：教える先輩も教わる後輩も毎日というのは、お互いにとても熱心ですね。

浅井：そうなんです。私も2年になったら教える側になったということで毎日8時

半に学校に来ました。ただ、今思うと恥ずかしいんですよ。私が正しい発音を指導ができたのかなってということが今もって不思議なんですね。受けた方には大変申し訳なかったかなと思ってしまいます。

石田：念書で教える側になられたということは、浅井さん中国研究会に入られたのですか。

浅井：はい。入りました。

石田：東亜同文書院の時の念書は、『華語萃編』初集をひたすら暗唱して、それを先輩に聞いてもらいチェックを受けていたそうです。愛大も同じですか。

浅井：はい。ただ、そり舌とか有気音とか私は後輩にちゃんと説明できたのかな、今思うと恥ずかしい思いです。だけど、後輩とも仲良くなり、中国語劇なんかにも一緒にやりました。

石田：豊橋の公会堂で上演された中国語劇ですね。上演メンバーは、やはり中国研究会と一緒に念書をされていた仲間の皆さんなのですね。

浅井：そうです。そういうことですね。基本的には中国研究会ですね。中研とよく言っていました。中研の仲間ですね。

石田：念書に先生がいらっしゃることはあるのですか。

浅井：それはなかったですね。完全に学生の勉強会です。ただ、中研などで飲み会のようなものがあつた時に先生に参加していただくことがありました。桑島先生や内山先生にも来ていただいたことがあります。

¹⁰ 念書、東亜同文書院で行われていた学生の自主的中国語勉強会のこと。課外で上級生が新生に中国語の発音を指導した。戦後、東亜同文書院から編入して来た学生を通して愛知大学に伝わり、1990年代半ばまで続けられた。

¹¹ 中国研究会。愛知大学初期、中国に関心のある学生が結成した研究団体。

石田：東亜同文書院は全寮制でしたから、朝、起きてすぐに念書をしやすそうです。しかし、愛大は学生寮もありましたが、通学生もいたでしょうから、遠くの学生は大変ですね。

浅井：私は家が近かったです。10分あれば8時に間に合いました。念書の参加者は、やはり豊橋の連中が多かったと思います。岡崎や名古屋からの通学生は念書にはほとんど来ていなかったと思います。そういえば津島とか一宮から来ていたのもいました。入学した年には伊勢湾台風があったのですが、そういった被害がひどい所の学生は豊橋に来ることができなかったので一カ月ぐらいは授業がありませんでした。

石田：念書は、教わるのが新生で、教えるのが2年生です。3年生や4年生は関わらないのですか。

浅井：そうですね。

愛知大学の中国語教授法について

石田：中国語の授業はどのようなものでしたか。

浅井：鈴木先生とか、桑島先生とか、内山先生、あるいは張先生が『華語萃編』初集を朗読して、まず発音の模範を示され、次に意味を説明されます。その後は皆で一緒に朗読します。

石田：現在の中国語の授業は、朗読とか暗唱というよりも文法理解が重視されていて、ちょうど高校までの英語の授業に近いものが一般的だと思います。鈴木先生や内山先生の授業はどうでしたか。

浅井：文法の勉強というのはなかったです。それを今日、是非、お話ししたいと思って

いました。今、私は愛知大学の社会人教育講座で中国語を勉強し直しているのですが、そこで驚いたのが、連動文だとか補語だとか、副詞や接続詞、そういう文法的なものがもの凄く前面に出ている授業なんですよ。そういったものは学生の時分には全くありませんでした。たしか『華語萃編』初集にも文法の用語はなかったと思います。

石田：はい。『華語萃編』初集は会話の例文だけで、文法についての項目や解説などもありません。

浅井：もちろん、教科書になくても先生は説明していたのかもしれませんが、当時と今の中国語の授業はかなり違います。とにかく中国語について「文法」という言葉は、我々の時代には使われてなかったと思います。

石田：それでは高校時代に受けてきた英語の授業のつもりで、愛大ではじめて中国語の授業を受けた時には驚くわけですね。

浅井：びっくりですよ。勉強の仕方が違うのですから。だから、今の愛知大学で中国語の授業を受けると、また驚いたわけです。中国語の文法ということに今になって気づいたのですから。

石田：当時の中国語の勉強は、こうしたことを言いたい場合はこのような言い方がある、ということ覚えていくことが中心なのですね。

浅井：そうですね。後とにかく声を出す。

石田：しかし、それでも分からないことばだとか、表現があるでしょうし、先生に何でもかんでも質問するというわけにもいかないでしょう。そうした場合は図書館で調べたりされたのですか。

浅井：辞書を引くということは、あまりありませんでした。当時、そもそも辞書があまりなかったと思うんです。『中日大辞典』もまだできてなかったわけですからね。今日は持ってきました（鐘ヶ江信光『中国語辞典』（大学書林、1960年）を取り出す）。

石田：これはどこでお買いになったのですか。

浅井：大学の中にあったあけぼの書店だったかな。眼鏡を掛けたおやじさん、ナカムラさんっていう方だったかな、そのお店だったと思います。

石田：これは定価 1,500 円とあります。当時としては高価ではありませんか。

浅井：そうですね。1,500 円。今でいうと 5～6,000 円ぐらいの感覚ですかね。たしか、これを先生たちが推奨してくれたのだと思うんです。そうでなかったから、買わないでしょうし、これだけとってなかったと思います。

浅井：そういえば内山先生は、テープレコーダーを授業でお使いになっていました。

石田：テープの音声は張先生の吹き込みだったのですか。

浅井：それもあったように思います。今から考えますとね、内山先生はわりと文法的なことをやっていたんじゃないかなと思うんです。鈴木先生と張先生の場合は何でも発音で覚えなさいという感じだった。鈴木先生と張先生はペアで、内山先生はお一人のこともあったかな。授業ではありませんが、中国語でよく覚えているのは、先輩たちに教えてもらった「草原情歌」¹²です。今でも覚えていますよ。他に

も国歌とかを皆で歌いました。歌いながら中国語を覚えるようなものですね。たくさん中国語の歌を教えてもいました。今は大分忘れてしまいましたが、今、そういうものを調べて覚え直そうかと思っています。中研の集まりで、学芸会のようなことがある時に歌っていました。

石田：鈴木先生、桑島先生、内山先生はみなさん東亜同文書院出身です。そういった先生が東亜同文書院についてお話しされることはありましたか。

浅井：あまりなかったですね。

石田：戦前は中国にいたことがある、といった程度のお話しですか。

浅井：そうですね。鈴木先生は、そんなに同文書院というものを持ち出さなかったと思うんです。

浅井：中国語の授業を受ける時、私たちは発音を本当に重視していました。きちんと覚えないと念書で後輩に間違った発音を教えることになってしまうからです。念書は、学生だけでやっていましたから必死です。そうなのが伝統だと思っていました。

中国研究全国ゼミ大会・野間清ゼミ

石田：ゼミは野間先生¹³だったそうですが、この車道校舎で開催した中国研究全国ゼミ大会というのも野間ゼミの活動なのですか。

浅井：全然関係ありません。全国ゼミ大会は学生だけでやりました。我々が3年生の時だったです。今から思うと生意気なことだったかもしれません。大会にはいろ

¹² 王洛賓「草原情歌」（1938年）。原題「在那遙遠的地方」。

¹³ 野間清（1907～1994）京都帝国大学卒、満鉄調査部などを経て愛知大学教授。



図 1 愛知大学車道校舎で開かれた中国研究全国ゼミ大会（前列向かって左端が浅井氏）

いろな大学が来ました。

石田：そうした活動は浅井さんの先輩方もしていたのでしょうか。それを引き継いだということなののでしょうか。

浅井：いいえ。先輩たちはタッチしていなかったですね。我々であちこちに手紙を書いて参加校を集めました。

石田：浅井さんの世代の中国研究会の方が呼びかけて開催されたのですね。

浅井：そうですね。京大だとか同志社、立命といった京都の大学、それに大阪市大も来ていました。東京の方は早稲田とか。

石田：全国ゼミ大会は4年生の時も開催したのですか。

浅井：いやいや。もう1回で終わりです。残念なのは記録がほとんど残っていないことです。学校の方にもないそうです。大会を開くことで手一杯で、それを記録するというようなことが全然なかったですね。

石田：全国ゼミ大会の開催した愛大のメン

バーというのは、どれくらいの人数だったのですか。

浅井：8人ぐらい。少なかったですよ。当時は、そういうものに関わっていること自体が就職にはマイナスの時代だったですからね。

石田：今泉先生も中国語を勉強したというだけで共産思想を疑われるようなことがあったと言っておられました。

浅井：おっしゃる通り。中国经济専門なんていったらまず駄目ですよ。

石田：そういう雰囲気の中で中国について勉強するっていうのは何かしら覚悟というか、それでもやりたいという気持ちが強いわけですよ。

浅井：高校時代の友だちの中には東京の名の知れた大学に入ったのも多かった。それに対して私はここで勉強するのであれば、やっぱり一番中国が有名なのだからという気持ちがあって、それで中国語を習いたいと思って入ったんですよ。

石田：全国ゼミ大会はどうでしたか。

浅井：やっぱり、我々としてももっと勉強しなければいけないな、と思いましたよ。あの頃は学生運動が盛んでしたが、全国ゼミ大会は、私からすると学生運動の過激さというより、本当にまじめな討論会っていうかな。中国のことを勉強すればするほど、中国は今みたいな大国になるなって思いました。思想や政治的に良いとか悪いとかいう概念は全然なかったです。単に中国を知りたいというものでした。

石田：当時、中華人民共和国とは正式な国交はありませんでしたが、愛知大学は文化交流という形で本の寄贈を受けたりしていました。そうしたことについて、他の大

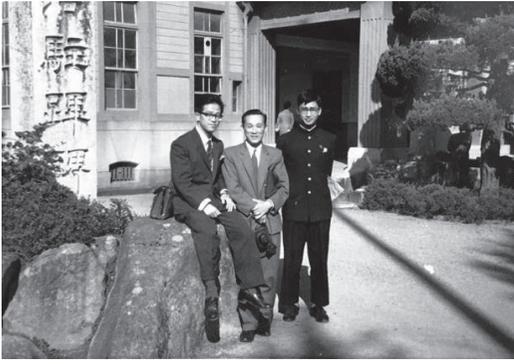


図 2 日本現代中国学会全国学術大会にて(中央が野間清、向かって右端が浅井氏)

学から何か質問などありましたか。

浅井:それは色々聞かれました。その時、愛大は『中日大辞典』をやっていましたし。

石田:『中日大辞典』編纂については、愛大生はもちろん、他校の学生も知っていたのですね。

浅井:そうですね。全国ゼミ大会に来た他校の学生の話からは、中国について愛大はレベルが高いんじゃないかと見てくれていたんじゃないかと思うんですけどね。

石田:野間ゼミは何名だったのですか。

浅井:6人かな。でも、そのうちの2人ぐらいは来たり来なかったりでした。それでも、皆、卒業させてくれました。野間先生は良い意味で学生に対して厳しかったですね。それでも家に何回か呼ばれたりもしました。中国語を選択して進級した仲間には先生も交えてとてもアットホームな雰囲気でしたよ。野間先生と山口大学で開かれた現代中国学会の全国大会に参加しましたが、勉強だけではなく広島の高島観光のような遊びもしていました。

就職

浅井:そうしているうちに4年生の秋くらいから就職活動をしました。我々の頃は

そんな早くから就職活動はなかったです。あの当時は知り合いがいるから、その会社に入るという感じでした。1年上の方には中日新聞入っている方もいましたね。

石田:中国語や中国研究を熱心にされていましたが中国の関係へ進みたいという希望はありましたか。

浅井:学校で勉強したことと就職は別のものだという考えでした。愛大で勉強するのであれば、愛大が一番強いこと、つまり中国を勉強したいと思ってやっていたわけです。当時、中国関係の就職といっても友好商社しかなかったです。この地方で就職するのに中国に関する知識というのは、現実的には活かすことはできなかったです。

石田:その後、実際に中国に行かれたのはいつでしたか。

浅井:55歳くらいだったかな。子供達を連れてはじめて中国に行き上海の駅に降りた時は感動しました。泰山や黄山にも行きましたね。ただ、いざとなったら中国語はなかなか出てこなかったです。それでも、愛大で勉強させてもらってありがたかったなと思っています。愛大で中国語や中国を学んだということは非常に良い人生だったなと。中国について権威があった愛大で中国語を学んだことにプライドを持ってきました。

(2020年10月15日於愛知大学東亜同文書院大学記念センター)